

辻の一軒茶屋（上氏家町）

今から百五十年ほど前、天保から明治の時代に、上氏家の道の辻に十軒ほどの家がありました。

そのうちの二軒に茶屋があり、手賀直吉というおじさんが住んでいました。

茶屋というのは、そこらを通る旅人が一休みして、お茶を飲んだり、売っている柿や栗や駄菓子（そまつなおかし）などを買って食べたり体を休めたりして、また旅を続ける休けい所です。

直吉じいさんは、だれにでも親切で、やさしくもてなしましたので、その茶屋は繁盛していました。

そんな直吉じいさんが、ある晩夢を見ました。夢の中に観音さまが現れたのです。

「直吉じいさんよ、お前の家のそばに行きたい。」と申されました。

「ああ、もつたいない。お観音さま、そんなら今どこに居なさるのですか?。」

「わしが今居る所は、鳥井の春日神社だが、暗くてさみしい所じゃ。どうしてもお前の家のそばに行きたい。」

といわれるとすうーと姿が消えました。



「ああ！お観音さま！。」

と直吉じいさんは、大きな自分の声で目が覚めました。驚いた直吉じいさんは、よく朝、明るくなるのを待つて、横根の神主さんを訪ねました。

「直吉じいさんよ、お前さんもその夢を見たのか、
わしもじゃ。」

「えっ、お神主さんもですかいの。そんならこれは、ほっとかれませんげの。」

「そうじゃ、すぐ探して、きちんとお祭りしなけりゃのう。」

二人はさっそく春日神社へ出かけました。しかし、神社のどこを探しても見つかりません。さらによく探すと、お宮さんの縁の下に木の箱があり、開けて見ると二体の観音さまがおられたのです。箱は虫がくい、くさりかかって、はしの方はもうくずれていました。

一体の観音さまは、十一面観音で、お顔の横や後の方に小さなお顔が十あり、正面のお顔はは



つきりしています。木造で身の丈一メートルぐら
いあつたそつですが、今は虫くれで腰から上の部
分だけしかありません。

もう一体の観音さまは、全身のお姿ですが、雨
ざらしにあつていたようので、お顔も手もわからな
いような観音さまです。

神主さんと直吉じいさんは、大切におつれして、
直吉じいさんの家の横にお堂を建てて、丁寧に
祭りました。

その後、病気なおしのお観音さまとして、みん
ながお参りをし、いつもお花やお供物が絶えませ



んでした。

時代が変わって、十軒程あつた家が、だんだんと少なくなり、手賀家が一軒になってしまったので、一軒茶屋と呼ばれるようになりました。

昭和になって手賀家も今の場所に移り、田んぼが耕地整理のためお堂も一緒に移されました。

平成になった今も、この手賀家は一軒茶屋という屋号で呼ばれています。

そして今、四代目がお正月やお盆はもちろん、ふだんでもお供物やお花を飾って、大切にお守りをしています。